



岐阜のイチゴ

甘みと酸味、絶妙のバランス
大粒でツヤ良くみずみずしい



よしき
早川 款基さん(岐阜市)

岐阜県の豊かな大地で育まれる農産物と、農業に情熱を傾ける人々にスポットを当てるシリーズ「ぎふの農業人」。29回目は岐阜市網代地区のイチゴを紹介します。岐阜のイチゴはツヤツヤと輝く実と、口に含んだ瞬間に弾ける瑞々しさと爽やかな甘さ、適度な酸味が特徴。おいしいイチゴで人々を笑顔にしたいと農業を志した早川款基さんに、イチゴづくりのこだわりをうかがいました。

イチゴ農家を目指し 新規就農研修所3期生に

岐阜県がつらたずりジナル品種の美濃娘を栽培する早川さん。今年度からは新しい品種、華かがりにも挑戦しています。「美濃娘はきれいな円錐形のイチゴで、すくなく艶があつて見た目がいいです。味は甘みがありつつ酸味もあり、バランスが取れています。イチゴは甘さだけあつても物足りません。適度な酸味があることで味わい深くなる。僕は美濃娘ってとても味わい深いイチゴだなと思います。見た目も可愛らしい感じですよ」と娘自慢をするかのように目を細めます。



食べごろを迎える美濃娘

手入れをしっかり行うことが 良いイチゴを育てるポイント

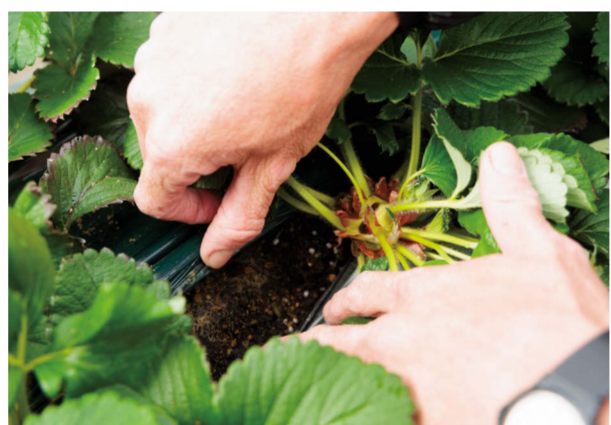
早川さんのハウスでは腰くらいの高さのベンチで栽培する高設栽培を採用しています。高設栽培することで病気のリスクも減り、良いイチゴを育てるのに適した環境を整えやすいからです。「水は井戸水を汲み上げ、培地はヤシガラを使っています。肥料を水に溶かして流すのですが、ヤシガラは保水性と排水性のバランスがちょうどいい。予防的な環境づくりによって病気を防ぐことができます。水や肥料の量だけでなく日射量、温度、湿度を管理して、イチゴにとって最適な環境を整えることが大事だと思います。」
「手入れをしっかりすることが良いイチゴを育てる大切なポイントです。11月中旬から約半年間収穫しますが、その間イチゴの苗は1つの株で花と実を付け続けます。イチゴにこどもすくく大変なんです。そこに寄り添う。水や温度、日光の当たり具合を管理したり、冷たい風が入らないよう調整し

たり。イチゴがしっかり頑張れるよう手助けしてあげることによって甘くておいしいイチゴが育つと思っています。」

栽培のスタートは秋。「親苗を購入して植付けます。親苗が成長してラシナー（ほふく茎）を出し始めるのが5月くらい。そこからポットに苗を受け、育てる期間が6、7、8月と続きます。苗をポットから抜きヤシガラに定植するのが9月です。10月くらいに花が咲き、11月中旬くらいに収穫がスタートします。秋は収穫を目前にしながら翌年の親苗の準備もしなければならぬ。今年の仕事と次の年の準備を同時にやっている状態です。」

これらの苦勞が報われるのが「おいしい」という消費者からの反応や、イチゴがのびのび育つ状態を見ること。「苗が育つて花をつけ、良いイチゴがなっているのを見ると良かったなと思います。」

生産農家とJAが
しっかり連携



高設栽培で育てられるイチゴ



毎日の手入れも欠かせない

本広告に関するご意見や感想をお聞かせください。抽選で「贈答用 美濃娘」をプレゼント!



抽選で10名様にプレゼント

円錐形で大粒、果皮が明るい赤でツヤが良く、外観が優れていることから贈答用にも喜ばれる美濃娘。果肉が硬いため、食感と日持ちが良く、味は、甘みと酸味のバランスが良いことから、スツクリとしています。

①郵便番号・住所②氏名③年齢④性別
⑤電話番号⑥紙面に関するご意見を明記して下記の方法でお申し込みください。
【はがき】〒500-8875(住所不要)
中日新聞 岐阜支社 広告部
「ぎふの農業人」係

1月19日(金) 必着

※個人情報(商品発送)において使用し、適正に管理します。
※当選者の発表は、商品の発送(翌月予定)をもってさせていただきます。



農の現場から／JAぎふ 藤田 彪さん

JAぎふ管内は水稲、イチゴ、柿、枝豆栽培などが盛んな自然の恵み豊かな地域です。地域社会に貢献しながら、地域になくてはならないJAであり続けるため、持続可能な経営基盤の強化とともに、普段から生産者の皆さんとの対話を大切にしています。私は生産者さんと最初に接する立場にいますので、お願いを聞いた相談に乗ったりすることが一番の仕事。いつでもお話しいただけるよう親身で丁寧な対応を心掛けると同時に、今後も地域の農業を守り、盛り上げるため生産者さんとの繋がりを大切にしていきたいと思っています。

県内各地で販売してもらっています。さまざまな面でサポートしてもらっています。僕ら生産者を支えてくれている存在ですね。また、資金面での相談にも乗ってもらい、低金利で借りられるアグリサポート資金を利用して事業を拡大することができました。」
早川さんは岐阜市園芸振興会いちご部会青年部の部長でもあります。46人が所属している中で、研修所の卒業生が増えてきました。「高齢で農業を辞められる方もいますが、それを補うような形で若い人、新規就農者が増えていくのは、新規就農者の受け入れ態勢がしっかりしていることが大きいと思います。僕も研修所で1年2か月の間、研修させてもらったことで自信になりましたし、独立後も相談できる人がたくさんいて心強かったです」と早川さん。

「これからも人を笑顔にできるようなイチゴを作り、消費者の皆さんに喜んでいただくことで世の中に貢献していきたい。そして、僕らの背中を見て、次の世代の人たちが農業でかっこいいなと思ってくれ、引き継いでくれるような魅力ある経営を続けていくことが目標です。」



耕そう、大地と地域の未来を。

ぎふの農業人の過去の記事はこちらから ▶



味も見た目も自慢の3姉妹
岐阜で生まれたイチゴ
濃姫、美濃娘、華かがり

JAは地域の未来を見守ります。